



古田織部(1/3)

古田氏の初見は、室町時代の寛正2年(1461)寛正の飢饉に際し、土岐氏に仕えていた細目郷領主(岐阜県加茂郡八百津町)の古田彦右衛門尉信正が不二庵(大仙寺)に領地を寄進したとする記録である。その後、一族は西濃地域へも進出したと考えられる。

明応4年(1495)の船田合戦で討死した中之元城主(岐阜県揖斐郡大野町)古田勝信を、織部の曾祖父に比定する説もある。

織部は幼少期、伊勢国員弁郡古田(現・三重県いなべ市)に居住したと伝えられる。

父・重定は土岐氏の支流にあたる桑原家(岐阜県大垣市上石津一ノ瀬)へ養子として入嗣した(大阪の陣で活躍した毛利勝永を桑原氏の出身とする説もある)。

このため、織部は桑原家で出生した可能性がある。

のちに桑原家は断絶し、織部は叔父・重安の養子となったが、重安に実子・重則が出生したため、織部は美濃国本巢郡の祐国寺へ移住したとみられる。重則の子・重勝は松阪城主となり、弟・重治とともに31年間在城した。

織部は永禄9年(1567)の織田信長による美濃進駐前後から織田氏に属したと推定される。

伯父・重安に伴い足利義昭に仕え、長岡藤孝(細川幽斎)の使番を務めた記録がある。

翌年の信長上洛に従い、摂津攻略に参加した。

永禄11年(1569)には摂津茨木城主・中川清秀の妹・仙を娶っている。

天正4年(1576)には山城国乙訓郡上久世荘(現・京都市南区)の代官となった。

天正6年(1578)7月、織田信忠の播磨神谷城攻めに使番として功を挙げ、同年11月の荒木村重謀反(有岡城の戦い)に際しては、義兄・清秀を織田方へ復帰させることに成功した。

その後も羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)の播磨攻め、明智光秀の丹波攻め(黒井城の戦い等)、さらには甲州征伐に清秀とともに従軍し、禄高は300貫と多くはないながらも武将として活動した。

信長没後は秀吉に属し、山崎の戦い以前に中川清秀へ秀吉への人質出質を容認させたという逸話が伝わる(『烈公間話』)。

天正11年(1583)正月には伊勢亀山城の滝川一益を攻め、同年4月の賤ヶ岳の戦いでも軍功を立てた。この時に清秀が戦死したため、織部は長男・秀政の後見となり、翌年の小牧・長久手の戦い、天正13年(1585)の紀州征伐・四国平定にも秀政とともに出陣した。

天正13年7月、秀吉の関白就任に際し、義父・重安の実子で義弟の重統を美濃から召し、長女・千を中川秀政の養女としたうえで娶らせ、中川家の家老としたという(重統の系統は織部の正系断絶後も中川氏家臣として存続)。同年9月には秀政後見を免ぜられ、同時期に従五位下織部助、ないし織部正に叙任されたと考えられる。

のちに九州平定・小田原征伐に参加し、文禄の役では秀吉の後備衆として150人を率いて肥前名護屋城東二の丸に在番し、朝鮮には渡らなかったとみられる。

ただし「古田手高麗」「御所丸茶碗」といった高麗茶碗の伝来は、現地での指導・関与の可能性を示唆する。当時の所領は南山城瓶原(現・木津川市)と大和井戸堂(現・天理市)に及び、知行は8千石であった。



古田織部(2/3)

慶長5年(1600)9月の関ヶ原合戦では東軍に属し、『系図纂要』によれば、その恩賞として1万石を与えられ大名に列した。

慶長20年(1615)3月30日、大坂夏の陣の直前、織部の茶堂・木村宗喜や薩摩島津氏の連歌師らが豊臣方に内通し京への放火を企てた罪により、京都所司代板倉勝重に捕縛された。「豊臣恩顧」の大名である織部も冬の陣以来の内通を疑われ、徳川方軍議の秘事を矢文で大坂城に通報したとの嫌疑を受け、大坂落城後の6月11日に子らとともに切腹を命ぜられた。

織部はこの際、一切の弁明をしなかったと伝わる。享年73。

大徳寺玉林院に葬られたが、現在の墓所は三玄院の寺域に属する。

さらに12月27日には嗣子・重広が江戸の本誓寺で斬首され、同時期に多くの子が切腹・討死したため古田家は断絶した(『断家譜』)。

一方で、娘婿・古田重統(重継)の系統(豊後国岡藩家老)や公家・鷲尾家、嫡男重広の女系子孫は現存する(古田織部美術館図録)。重広の正室(仙石久秀の娘)は実家に戻り、兄弟・仙石忠正の庇護を受けつつ父家の次代当主となった。

茶の湯に関しては、天正10年(1582)以降の千利休書簡に織部の若年時通称「左介」の名が見え、この頃に利休と相識・入門したと考えられ、のちに「利休七哲」の一に数えられた。

松屋久重編『茶道四祖伝書』所収「古織公伝書」には、佐久間不干斎(信栄)の伝聞として「織部は初め茶の湯を厭いしが、中川清秀の勧めにより上々の数寄者となる」と記される。

『慶長年間における武家相応の茶の湯』によれば、織部は天正12年(1584)に大阪城を訪れ、織田有楽斎とともに豊臣秀頼に茶を献上したという(その後、両名で茶を喫した旨の逸話が残る)。

天正19年(1591)に秀吉が利休追放を決するや、親交の厚かった諸将が秀吉を憚って見送りを避ける中、織部と細川忠興(三斎)のみが堂々と見送りを行った。

これに対して秀吉の咎めはなかった。利休没後、織部は「天下一の茶人」と目された。

慶長19年(1614)、京都方広寺大仏再建の鐘銘文を記した東福寺の文英清韓が、金地院崇伝・林羅山らにより徳川家康への呪詛と受け取られて京で謹慎となった折、織部は慰藉のために茶を点てたと伝わる。

かかる行為は、当時の織部が利休に比肩する権勢と文化的影響力を有していたことを示唆する。

慶長4年(1599)2月28日、博多の豪商・神屋宗湛は毛利秀元・小早川秀包とともに織部の茶会に招かれ、織部茶碗の斬新さに驚き「セト茶碗ヒツミ候也。ヘウケモノ也」と記した(『宗湛日記』)。

織部は「破調の美」を表現するため、器物を意図的に破碎・接合して生じる美を肯定し、その実例として、縮尺のため茶碗を十字に断ち切り漆で再接着した「大井戸茶碗 銘・須弥(別銘・十文字)」や、墨跡を二分した「流れ圓悟」を挙げ得る。

織部はまた、小間の息苦しさを嫌い、茶室の外に展開する「鎖の間」や書院での茶の湯を試み、開放性と華やぎを志向した。

織部好みの茶室として、浄土寺・露滴庵(広島県尾道市、竹林院の写し)、藪内流の「燕庵(えんなん)」「篁庵」「蓬庵」などが知られる。

ただし、初代剣仲の手になる「燕庵」は元治元年(1864)の蛤御門の変で焼亡し、現存の「燕庵」は有馬郡結場村・武田儀右衛門邸から移築された写しである。



古田織部(3/3)

織部は、千利休の教え「数寄ト云ハ(人と)違而スル」に従い、利休の静謐に対置される動的な「破調の美」によって道具組を行い、将軍・大名層の作法を整備した。

これが「織部流」と称される所以である。

門下・影響圏には、徳川秀忠、伊達政宗、佐竹義宣、金森可重、佐久間将監、毛利秀元、浅野幸長、島津義弘、小早川秀秋、大久保忠隣、石川貞通、大久保藤十郎、大野治長・治房、猪子一時、小堀遠州、上田宗箇、板倉重宗、南部利直、永井尚政、佐久間勝之、岡部宣勝、船越永景、近衛信尋、広橋兼勝、常胤法親王、本願寺教如、江月宗玩、安楽庵策伝、角倉素庵、本阿弥光悦・光益、松屋久好、大文字屋宗味、針屋宗春、上田覚甫、服部道巴、中野笑雲、原田宗馭、清水道閑らが列せられる。

織部の「武門の茶法」はのちに小堀遠州・片桐石州らに継承された。

茶書としては『織部百ヶ条』があり、弟子・大坂衆の岡村百々之介が記した『古織伝』のほか、浅野幸長が上田宗箇を介して問答した『茶道長問織答抄』、伝書として『古織公伝書』『草人木』『数寄道次第』『古田織部正殿聞書』等が伝わる。

加藤唐九郎は「利休は自然の中から美を見いだした人であるが、作り出した人ではない。

織部は美を作り出した人であり、芸術としての陶器は織部から始まっている」と評している。

なお、織部当時の点前は、平成期に宮下玄霸により発足した古田織部流正伝会(織部流温知会)において忠実な復元・修正が試みられている。



山口城

濃尾平野の縁辺に位置する船来山を越え、国道157号を遡ると法林寺の集落が現れる。

周辺には山口城・法林寺城・祐向山城が所在し、岐阜市の掛洞城を加えると、法林寺谷から濃尾平野へと望む尾根線(権現山―祐向山)上に、西から東へ連続して築かれた山城群を形成する。

当地は谷汲街道と根尾街道の交差する交通の要地であり、最も急峻な山稜に位置するため、山頂からは法林寺集落・船来山・濃尾平野を一望し得る。

現在は文殊の森公園として整備され、三城を尾根伝いに踏査可能であるほか、法林寺谷の山麓から林道が整備され祐向山城への登路も確保されている。

三城の相互関係は文献上明瞭ではないが、地勢的条件から、岐阜市側・山県市側・濃尾平野方面を俯瞰しつつ相互補完的に展望と防御を担った可能性が高い。

山口城は権現山西端の山頂に立地する山城で、戦国武将・古田織部の生誕地と伝承される。

山頂部には削平地(平場)が残存し、曲輪造成の痕跡と認められる。

城郭平坦部の周囲には幅2〜6メートルのテラス状地形が周回し、腰曲輪を形成していたと推定され、この腰曲輪は明瞭な切岸により四段に区分される。

さらに南東約100メートルには急激な鞍部を越えた小規模平坦地があり、主郭部と南北に連携して城域を構成していたと考えられる。



祐向山城

祐向山城は岐阜市境の山頂に築かれた山城であり、三城中もっとも標高が高く、岐阜城方面を望見し得る。山頂には楕円形の曲輪を認め、北西側の切岸は険しく、法林寺城方面へ続く西尾根には堀内障壁を伴う二条の堀切が穿たれている。

本遺跡は、中世寺院「祐向寺」を擁した山麓遺跡に淵源を持つとされる。

各務原市船山北古窯からは「奉施入 建久5年(1194)10月18日 祐向寺」と刻された大皿の刻銘陶器が出土しており(2000年、岐阜県文化財保護センター)、建久5年に祈願のために焼かれた寄進品が何らかの事情で窯内に遺存したものと考えられる。

法林寺谷山麓には、旧毘沙門堂跡とされる平場があり、注連縄が張られた御神木と五輪塔片が安置される。また登路沿いにも小規模平場が点在し、密教系中世寺院の景観的痕跡を留める。

「滋賀県大般若波羅蜜多經調査報告書 二」(1994、滋賀県教育委員会)によれば、上田上村・若宮八幡宮所蔵の大般若經第四百七十六巻・第四百九十三巻に、応永26年(1419)10月10日および翌27年正月25日に「濃州本栖郡祐向寺徳杖坊」にて筆写した旨の記載が見え、祐向寺の書写活動と学寮的機能が示唆される。

戦国期に入ると、祐向山城の名は史料上にも確認される。

とくに永禄7年(1564)、竹中半兵衛が稲葉山城を占拠した際、城主・斎藤龍興が退避した先として「鵜飼・祐向・揖斐」が挙げられており(1994、横山住雄)、当地の軍事的重要性がうかがえる。さらに天文9年(1540)の伊勢神宮御供米に関する「斎藤利茂下知状」には「祐向」の地名が見え、正倉院所蔵「大井庄年貢結解状」天文12年(1543)10月10日条には、在庄銭を「ユウカノウ城」へ納付した旨の記述がある(同、横山)。

これは本来「イコウ」と読むべきを字面どおり仮名化したものと考えられ、当時すでに在庄銭を徴収し得るほどの勢力基盤を有していたことを示す。

以上より、祐向山城は宗教的拠点から軍事的拠点へと転換した複合的性格を帯び、その形成・発展のプロセスは、なお検討の余地を残す課題である。



掛洞城

掛洞城は本巣市の文殊山北方に位置する山城で、美濃国衆の拠点として戦国期に築かれました。

城跡は複数の曲輪、堀切、土塁が良好に残り、その縄張は防御性に優れています。

山頂付近の主郭は広く、周囲の尾根を遮断する大規模な堀切が見られ、当時の軍事技術の高さを示しています。斎藤氏や織田氏の支配の変遷に伴い、この城もまた戦略的役割を担ったと考えられます。

保存状態が良いため、研究者からも注目される存在であり、中世山城の典型例として貴重です。

現在は登山道から遺構を観察でき、地域住民や歴史愛好家に親しまれています。

掛洞城は、美濃の戦国史と本巣の地域史を結ぶ重要な史跡です。



法林寺城

法林寺城は本巣市法林寺地区の文殊山北西尾根に築かれた戦国期の山城です。主郭を中心に複数の曲輪や堀切が配され、尾根を巧みに利用した縄張りが特徴的です。築城者は定かではありませんが、斎藤氏やその被官筋の土豪が拠点としたと考えられています。戦国後期には織田信長の美濃進攻の際に利用された可能性があり、地域支配や防衛の要であったことが推測されます。現在も遺構の規模は明確に残っており、登山道から城郭構造を観察することができます。法林寺城は、地域の中世山城群の一つとして、山城研究においても重要な位置を占めています。山林に囲まれた静かな環境の中で、中世の戦乱の気配を今に伝える貴重な歴史資源です。



法林寺此奥古墳群

本巣市法林寺地区の尾根上に分布する法林寺此奥古墳群は、6世紀末から7世紀初頭に築かれた横穴式石室を持つ古墳群です。現在確認されている古墳は十数基に及び、その中でも6号墳は石室が比較的良好に保存されており、内部構造を観察できます。出土した鉄製品や土師器は、この地の有力豪族が大和政権と深く結びついていたことを示しています。墳丘の規模からも、この地に古代的な権力が存在していたことは明らかであり、本巣国造の勢力圏と考えられています。古墳群は市指定史跡として保存され、歴史教育や郷土学習の場としても活用されています。周辺の自然環境と調和した景観の中に点在する古墳群は、訪れる人に古代豪族の生活や文化を想像させる力を持ち、本巣市の古代史を語るうえで欠かせない貴重な遺産です。



毘沙門堂と鷲見一族

法林寺地区にある毘沙門堂は、古くから信仰を集めた堂宇であり、戦国期には在地武士・鷲見(すみ)一族の祈願所と伝わります。鷲見氏は美濃国内で勢力を誇った国衆で、斎藤氏や織田氏に従いながら地域支配を担いました。毘沙門堂には、戦勝祈願や領内安泰を願った鷲見氏の足跡が残り、武士と寺社信仰の深い関係を示しています。周辺には一族ゆかりの伝承も伝わり、毘沙門天信仰がいかに戦国武士の精神的支柱であったかを知る手掛かりとなります。現在の建物は再建されたものですが、地域住民によって守られ、毎年の祭礼や祈願の場として機能しています。本巣市の歴史において、宗教と武士団の関わりを示す象徴的な文化財といえます。



本巢国造(美濃国造)

古代律令制以前、本巢の地には「本巢国造(もとすのくにのみやつこ)」が置かれていました。国造はヤマト政権によって地方に派遣された支配者であり、本巢国造は後に美濃国造と称されました。『先代旧事本紀』にもその名が記録されており、この地域が古くから大和朝廷の支配下にあったことを示しています。

法林寺此奥古墳群をはじめとする大型古墳群の存在は、この地に強大な在地首長がいた証拠であり、鉄器の普及や渡来系文化との交流が早期から行われていたことを裏付けます。

本巢国造の存在は、本巢市が古代美濃の中心の一つであり、東山道を通じて大和と尾張・東国を結ぶ交通の要衝であったことを意味します。

今日でも本巢の地名や史跡には、その古代的性格を伝える要素が色濃く残されており、古代地方支配研究の上で欠かせない存在です。



月洞山監視哨跡

月洞山監視哨跡は、太平洋戦争末期に旧日本軍が設置した航空監視施設の跡地です。敵機の来襲を監視し、岐阜地域の空襲警戒網の一部として機能していました。高所からの視界を活かし、戦時下の住民保護に資する重要な役割を果たしました。

戦後は荒廃しましたが、遺構の一部が残され、近年は戦争遺跡として注目されています。平和学習や戦争史研究の場として活用されるとともに、古代から近代に至るまで多様な歴史を刻んだ本巢市の重層的な歴史を示す象徴的な史跡です。